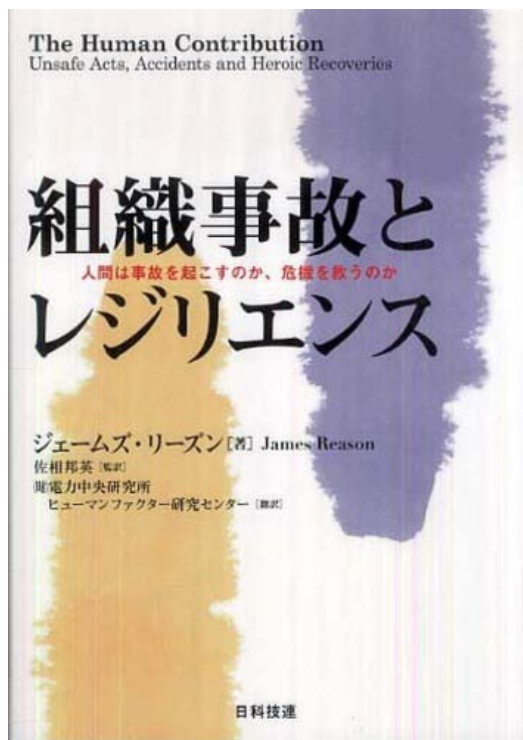


組織事故とレジリエンス

—人間は事故を起こすのか、危機を救うのか

ジェームズ・リーズン [著]、佐相邦英 [監訳]、(財)電力中央研究所ヒューマンファクター研究センター [翻訳]
日科技連出版社 368 頁 ISBN 978-4-8171-9353-7 定価 4,200 円 (税込) 2010 年 6 月発行



〔目次〕

- 第 I 部 イン트로ダクション
 - 第 1 章 事故を起こす人間、危機を救う人間
 - 第 2 章 心のユーザーへ
- 第 II 部 不安全行動
 - 第 3 章 ヒューマンエラーの性質と種類
 - 第 4 章 違反とさまざまなルール関連行動
 - 第 5 章 不安全行動の見方
- 第 III 部 事故
 - 第 6 章 エラーの罫と再発する事故
 - 第 7 章 重大事故の調査
- 第 IV 部 驚異的なリカバリー
 - 第 8 章 訓練、規律、リーダーシップ
 - 第 9 章 正真正銘のプロフェッショナリズム
 - 第 10 章 スキルと幸運
 - 第 11 章 すばらしい臨機応変
 - 第 12 章 驚異的なリカバリーの源泉
- 第 V 部 レジリエンスを高める
 - 第 13 章 個人の注意深さと集団の注意深さ
 - 第 14 章 安全を求めて

本書は「スイスチーズモデル」を提唱した『組織事故』の著者、ジェームズ・リーズンが 2008 年に出版した『*The Human Contribution*』の翻訳書である。人間は事故を引き起こす一方で、信じられないような危機から驚異的な脱出劇をやっている。この人間がもつ二面性に光を当て、人間をエラーの潜在的要因と見なすだけでなく、人間を「危機を救うヒーロー」として見ることの重要性を説く。そして、想定外の事象による機能不全から迅速に回復できるレジリエンスを備え、安全性の高い組織とはどのようなものかを広範に解説する。

第 I 部のイントロダクションは、導入部として本書の内容を理解するための基本的枠組みが提示されると共に、ヒューマンファクターの基礎である心理特性（意識と無意識、記憶、注意など）について解説されている。

第 II 部では人間の不安全行動、すなわちヒューマンエラーと違反、およびそれらに対する人々の受け止め方が論じられている。まず第 3・第 4 章ではヒューマンエラーや違反をはじめとするルール関連行動の性

質と種類、誘発要因が解説され、続く第 5 章では、不安全行動と重大事故の発生に関するとらえ方が論じられている。これまでに提唱されてきた主要な理論的モデルが紹介されるとともに、著者自身の提案する「スイスチーズモデル」に関する発展の経緯も併せて示されている。

第Ⅲ部は事故の再発防止をめぐる議論である。第 6 章は様々な産業領域で生じる事故には類似した再発パターンがみられることを指摘し、陥りやすいエラーの罫の排除をマネジメント上の課題と位置づけている。第 7 章ではこれまでの事故調査における着眼点が、事故に直接関与した人間のミスから組織およびシステムの問題点へと移行してきた経緯を概説すると共に、組織・システムの問題を過度に重視する“振り子が振れすぎた”現状を指摘し、組織事故の直接原因と状況要因を区別して理解することの重要性を論じている。

第Ⅳ部では本書の大きな特色である「危機を救うヒーロー」として人間を捉える視点とその重要性が論じられている。第 8 章から第 11 章では、極限の危機事態を見事に切り抜けた驚異的なリカバリーに関する 11 の実例が紹介され、いずれも“奇跡”と称されるほどの危機の回避が、どのような経過で実現されたのかが示される。つづく第 12 章では、これらの実例にみられる共通点を探り、人間による驚異的なリカバリーの源泉についての考察が論じられている。

第Ⅵ部では、組織のレジリエンス向上という観点から、人間を潜在的な危険性とみなす視点と危機を救うヒーローとみなす視点の統合が図られている。第 13 章では、医療分野を例に取り上げて、組織のレジリエンスを高めるための「注意深さ」が、現場第一線の人々と組織全体の双方のレベルで求められることが論じられる。最後の第 14 章では、これまでの議論を踏まえつつ、さらに 2 つの概念的モデルを導入し、組織全体の戦略面と現場の安全管理における戦術面から、安全性を追求するための実際的な方策に関する考察がなされている。

従来のヒューマンファクター分野ではしばしば看過されてきた「危機を救う」という人間の側面に光をあてた本書は、産業安全に関心を持つ研究者には参考になる部分が多いであろう。しかし、著者自身も述べているように、本書は学術書ではなく、実務者のために書かれたものである。安全性の維持・向上のための絶え間ない戦いに臨む上でのひと味違う「哲学」が、本書全体に散りばめられている。安全管理に携わる実務者の方々、特にこれまでの取り組みにやや行き詰まりを感じている方々に、有益な視点を提供してくれるものと考えられる。